

待望 未来へキックオフ

全国草サッカー女子開幕 県勢4チーム

小学生サッカーの祭典、第37回全国少年少女草サッカー大会（朝日新聞社など主催、第一三共ヘルスケア協賛）が11日、静岡市で開幕した。コロナ禍を経て、開催は4年ぶり。初日は女子の部（24チーム参加）のリーグ戦24試合が清水ナショナルトレーニングセンターで行われ、県勢4チームも熱戦を繰り広げた。女子の部は13日まで、男子の部は17日に試合が始まる。

2勝で1位突破 好機を演出

クワトロGLIC



ドリブルで攻め込む宇都宮心愛選手⑨

2019年の前回大会3位で、優勝経験もあるクワトロガールズFC（御殿場市）は2戦2勝でリーグ戦を1位で通過した。

初戦で、強豪のAC等々力マイメド（神奈川）を3-0で破って勢いに乗った。次戦の陣屋アイリス（埼玉）戦では、ボールを保持しながら、素早くサイドに展開。サイドからワンツィーやドリブルで相手の守備を崩して、チャンスは何度も演出した。MF宇都宮心愛選手（6年）の2得点などで6-0で勝利した。

望月選手は「ドリブルでゴールまで運べたのでよかった」。左足で豪快なロングシュートを決めたMF望月真鈴選手（6年）は「次も点をとってチームの勝利に貢献したい。優勝が目標です」と語った。（黒田壮吉）

成長する夏

ドリームgirl



ドリブルする鈴木心海選手⑩

ドリームサッカースポーツ少年団girls（沼津市）は2-6年生11人で参加した。普段は少年団のチームで男子と一緒に活動。女子だけでチームが組めたことから大会に出場した。結果は2戦2敗で3位トーナメントに進んだ。

初戦は瀬戸NFC（愛知）に0-6で敗戦。2試合目は19年の前大会覇者・パティフットボールクラブ（東京）の素早い攻撃に苦戦し、0-14で敗れた。

杉山恵一監督は「勝利が全てではない。夏は体も心も成長する大切な時期。子どもたちが試合を通じて何かを感じ、成長してくれば」と話した。来週の男子の部の大会にも参加予定の鈴木心海主将（6年）は「悔しい。次は勝てるように頑張りたい」と話した。（黒田壮吉）

初ゴールを

Sorriso



相手選手と競り合う池田美音選手⑧（手前左）

Sorriso Shimizuは清水区にある清水FC女子、GFC清水北、蒲原FCアミーゴの合同チーム。3チームの選手計15人がベンチ入りしたが、初戦の一宮FC（愛知）戦は0-11、続く戸塚FCG（埼玉）戦は0-7で敗れた。

攻守の要の一人、池田美音選手（6年）は「合同練習の機会に限られ、相手とは団結力の差を感じた」と悔しがった。何度も相手ボールを奪った小川詩苑選手（6年）は「次はつないだパスをゴールまで持っていきたい」。リーダー役の中橋海咲選手（6年）は昨春新体操から転じ、競技歴は1年半ほど。「皆で力を合わせて勝利を目指すのがサッカーの魅力。初勝利、初ゴールを果たしたい」と力を込めた。（杉山圭子）

チーム一丸

メジエール



左サイドから攻め上がる鈴木心海選手⑩（右手前）

FC Fujimejierジュニア（富士市）の主将の西村莉々那選手（6年）は4年前の大会経験者。チームの普段の練習は夜で、どの選手も炎天下でのプレーに慣れていない。「2年の時はもっと暑く感じた。初めて経験する後輩たちのほうが大変なはず」と、下級生を気遣った。

初戦の名古屋フットボールクラブ（愛知）戦は後半途中まで互角だったが1-3で敗れ、青梅新町FCシヨコラ（東京）戦は0-4で連敗。初戦の後半、交代出場するなり同点ゴールを決めた井上真孝選手（5年）は「チームのために、と思い切っただけ」と振り返った。2試合を終えて、西村主将は「私ももう少し動けていればよかった」と悔しそうだった。（杉山圭子）